

鶴見俊輔 追悼小特集

鶴見俊輔さんが、2015年7月20日に亡くなられました(享年93)。

アナキズム文献センター通信編集部では、鶴見さんと生前にご親交のあった方に追悼文を寄稿いただきました。

文献センター通信

第 32 号
2015年9月30日
一部 100円

主な内容

鶴見俊輔追悼小特集	1
責任感の強かった人(大澤正道)	1
鶴見俊輔氏のこと(北村信隆)	2
追悼・鶴見俊輔さん(富板敦)	4
八・六広島集会参加報告	6
タデウシユ・カントル生誕百年	7

責任感の強かった人——鶴見俊輔

大澤正道

鶴見俊輔は責任感のとても強い人だった。

こんなことがあった。鶴見の口利きで石川三四郎を偲ぶ会での大勢の人たちの発言をまとめて『中央公論』が載せるというので、わたしや秋山清ら数人が鶴見の寄遇先に集まり、一日かかって録音を起こし、百枚あまりの原稿をこしらえた。

当時、『中央公論』といえば一流誌で、『アナキズムもえらくなつたねえ』とにこにこしながら秋山が言っていたのを覚えてる。

ところが待てど暮せど掲載されない。結局、雑誌の都合で掲載が見合わされ

たと知り、がっかりした。「雑誌は出るまで載るかどうかわからない」と鶴見が言っていた通りになってしまったのである。

しかしそれからだいぶたち、忘れてしまった頃になって一冊の冊子が鶴見から送られてきた。例の原稿を鶴見は自費で冊子にしたのである。ずいぶん責任感の強い人だなと感じ入った。

その後しばらくして、鶴見から電話がかかり、べ平連に参加しないか、いまなら委員になれるという話だった。しかしわたしは鶴見の周辺の人たちと一緒に運動出来そうに思えなかったので、遠慮した。

鶴見はめったに己の感情を見せない人だったが、その時はちよつと面白くなさそうな口ぶりだった。そういうえば大分以前に、鶴見から転向の共同研究のグループに入らないかと誘われたが、やはり辞退したことがある。

わたしと鶴見を結んでいた接点は石川三四郎だった。忘れられた思想家である石川の復権のために鶴見はよくやってくれた。石川の葬儀の時や偲ぶ会ではみずから書記を買って出していた。

ただ鶴見が力を入れていた「市民」にはどうしてもわたしは馴染めなかった。わたしは市民じゃなくて都民だなんて冗談を言ったこともあった。余談になるが「人民」もわたしは馴染めなかった。石川は「農民」と言っていたが、農民でもなかった。とどのつまりわたしはわたしということにしていた。

鶴見と最後に縁があったのは例の日外アソシエーツ版『近代日本社会運動史人物大事典』事件である。わたしは向井孝らの驥尾に付してこの悪事典を潰そうと努力したが、なかなかうまくいかない。

たまたまコスモス忌で鶴見が講演すると知り、鶴見に直接訴えることにし

た。鶴見もあの大事典の編集委員に名を連ねていたが、幸か不幸か病氣中で実際にはほとんど関わっていないかったらしい。

講演の後の質疑の機会をとらえて、わたしは大事典の改訂が廃刊に努めてほしいと訴えた。それを聞いて向井は「じつじつこと言わはる」と感じたそうだが、鶴見もさるものでボスとしてこうやれというのはわたしのマナーに反する、それよりアナ系の人名事典を作ったらどうか、そうならわたしも協力すると返してきた。やはりわたしより一枚上手だった。

こうして『日本アナキズム運動人名事典』の地獄が始まった。すったもんだはあったが、鶴見は最初の約束通りちゃんと原稿も書いてくれた。定宿にしていた神田の山の上ホテルにわたしは何回か原稿を買いに行った。

ようやく事典が完成し、記念の集まりに出席できなければ、発起者としてメッセージでもぜひ寄せてほしいと手紙を出したら、折り返し以下のような返事が速達で届いた。よほど急がれたとみえて封筒の宛名は「大正正道様」となっていた。

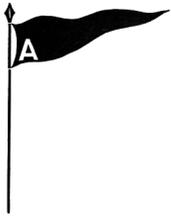
ちなみにわが『人名事典』は奥沢邦成のぼる出版の尽力で再版を出し、近く諸氏の尽力により規模も倍増された改訂新版刊行というまれにみる快挙が実現される予定である。一方、日外版はいまや見る影もない。ざまあみろ！だね。

アナキストとは、アナキスト気質をもった人のことでしょう。だから、一緒に運動することはむずかしく、一緒に事典をつくることもむずかしい。

このむずかしい事業をなしとげた編集者のみなさまに、敬意をささげます。

二〇〇四年九月八日 鶴見俊輔

大沢さんへ
悪筆ゆえ、読めるくらいにみじかく書きました



私のなかの「鶴見俊輔氏のいっ」

北村信隆

鶴見俊輔氏が、去る七月二十日に亡く

なられた。享年九十三歳であった。後日知人のメールで知った。二十四日の『朝日新聞』（夕刊）には、近親者と少数の方々に看取られ二十二日茶毘に付されたという経過と、横山貞子さんと鶴見太郎さんの「あいさつ文」や太郎さんの「会見談」が掲載される。菩提寺での太郎さんの会見では「生前から葬式はしないとメモを残してた。その通りにしたので、本人も納得のいく形でしょう」と語られたという。

そういえば十数年前のある日、「家の会」の会場で鶴見さんと（曾て『家の会』で、伊丹十三の映画「お葬式」の脚本が鶴見さん自身がテーマにされたこともあり）「葬送の話」をしたことがある。死亡届を役所に届出し埋葬許可書をもれば「火葬場にてお骨にしてもらう費用七万円だけです」などと言うと、何か鶴見さんがえらく感激されたことがあったことを思い出した。

鶴見俊輔氏の文章との出会いで「退

行計画」（『展望』筑摩、六八・三）及び「退行計画」『不定形の思想』（文藝春秋、六八・四）が、「何故か、この場から消えてしまいたい、去ってしまいたい」と思っていた当時の私にインパクトをあたえたことを憶えている。「癒しと諦めと希望」という強いインパクトをうけた。《：自分がなければならないという理由は、薄い。自分が消えてゆくということへの恐怖も、薄い。》（略）：いくら永遠に運動をつづけても、自分にはぶつかれないわくの部分があり、自分にはおとることのできない広い面積がのこっているという点で、いくら自由にふるまっても、自分とはじこめられているのだ。…（略）…いま美しいと思っ

鶴見さんは「思想」とは信念と態度と選択（行動）であり、「哲学」とは、自ら考えることだ、とよく言われまた書かれています。《「私は殺した」から始まる哲学―戦争責任をめぐって―》という講演（二〇〇三年四月、イラク戦争時）があった。「偶然、私には殺せという命令が下らなかつたが、命令が私に来たらどうしたか」というのは、戦後になってからずっと六十年間考えてきた残された問題で、その解答は戦後何十年も経つてから思い至つたという。そして「私は殺した、殺すのは悪いということ」を、一息に言えるような人間になりたい。これが私の現在の理想です」という。五歳の時の張作霖爆殺がつきつけた問題は、国が悪いときに自分は何をするかという哲学的な残された問題ですと七十五年間悩んでいた問題だったという。戦争責任の中心は、「自分がどうするか、ということなのだ」という。ある一つの命題と仮の答えを見出して完結し、あとは思考を停止するという流儀をとらない。たゆまぬ往還的問いかけと研鑽・検証を繰り返される。

随分昔、鶴見さんはハワード・ジン

とラルフ・フェザーストンの「京都集会」やのちに帰ってきた脱走兵ホイット・モアの「枚方集会」でも同時通訳と司会をされたことがあった。枚方集会での私の質問のあと続けられた知人女性からの質問（「国家について、どう思うか」）に対して、鶴見さんを介してのホイット・モアの答えは「どのような国家のことですか」だった。「それが、彼の答えです」と付随説明され話される鶴見さんの愉快な顔は忘れられない。鶴見さんは、「家の会」でも、いつも質問に対して一呼吸間をおいて一息に語られる。柔和な顔ときらきらと眼光鋭い厳しい顔を交互させながら、誰にでも向き合つて話される。英語で考えることが多いと聞いていたから、その一呼吸の間に質問者の発言内容を咀嚼しておられるのかなとも、思える。

余談だが、私のアナキズム運動への関心とイメージは「ベ平連」に始まり「S NCC」（米の学生非暴力調整委員会）、共同体「紫陽花邑」などが、「破壊から創造」も「相互扶助」や「連合」も混在する。別の言い方をすれば、「仏道の三宝である」①「仏（ブツダ）」②「法（ダルマ）」③「僧（サンガ）」④「決まり事・した人、⑤「法（ダルマ）」⑥「決まり事・

約束ごと、③「僧（サンガ）」④「組織において、「個と全体がどのようなものとしてあるか」という……。

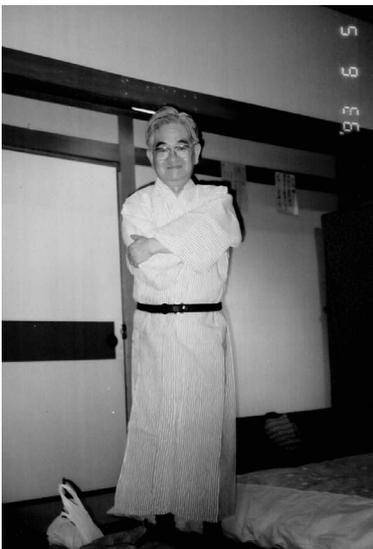
二〇〇三年頃、『アナキズム運動人名事典』の編集に執筆者の一人として名を連ねていた私は、体調不良で未着の鶴見氏担当の人名項目原稿の下書き的執筆作業を最終的に鶴見さんの修正追補を加えてもらう方針・方向で進め、「下書き的原稿」を送付し、後日京都府ランビアのレストランで「食事しながら話そう」ということになった。食事を挟んだとは言え対面で六時間余に及ぶ長時間の個別レクチャーは、私はそれが最初で最後、ただ一度の体験であった。話の締めくくりの最後に「私の書きたいのは明石順三や中里介山で、私が書く。その他については君の執筆名で出そう」と言われたのは驚きであった。帰宅の途中、地元駅の駅に降りて近くの飲み屋さんに入つて「すこぶる酒をおつた」のだ。別れてから車中「頭いっ

ぱいの知恵熱^①が出てきた。それを抑えるために何度も酒をお代わりしたのを憶えている。その後たくさんの「宿題」を買った気がした。いまでも、その「宿題」

（問題）は私の中に残されている。また鶴見さんは、私にとつて「うつ」の大先輩でもあり大教授でもあつて、九三年「家の会・合宿」時、連れしょんをしながら「うつ談義」をしたこともある。

同時代の一時期・一刻をご一緒することが出来た。有難うございました。いまそのことに深く感謝したい。また最期に「じゃあ」と言われるのだろうか。いまは静かに合掌しながら「結び」とします。

九三年の「家の会・合宿」（千本えんま堂）時、浴衣姿に皮ヘルトを締め、ボースに包んでくれる鶴見後輔氏



追悼・鶴見俊輔さん

富板 敦

「生きているうちにまたあいましょ

う。」と締めくくられた年賀状を鶴見俊輔さんからいただいたのは、二〇一一年一月一七日。ちょうど『日本アナキズム運動人名事典』（ぼる出版、二〇〇四年刊）の増補改訂版の作業中だったので、すぐに「アナ運動事典の重版についてご意見をうかがいにお邪魔したい」と葉書を出した。

一月二十九日付でお返事をくださった。「アナ運動事典の重版よろこばしいことです。私はアナキズムをアナ気質（ゲー・アナルシスト）によって定義します。もうひとつ、ミレニアムという区分においてはどうでしょう。日本では、一八三〇年代に、明治以後をこえる人々がいたように思います。良寛など。ラナルド・マクドナルドもいれてよいと思います。俳諧師。…」でかい！いつもの鶴見さんがいた。スケールの大きな鶴見さんの新事典への意見を直接うかがいに行つたのは三月五日、

東日本大震災の六日前だった。

それから二カ月半が経ち、五月に皓星社の藤巻修一さんから「鶴見俊輔語録」を編んでほしいと依頼され、三カ月で編集を終え、九月三〇日に京都のご自宅をお訪ねしたのが鶴見さんと対面した最後になった。大部となった「語録」（二〇一一年一月刊）は結局二分冊とし、『鶴見俊輔語録（一）定義集—警句・箴言・定義』には、前書きとして「定義に近く」と題した文章を、『鶴見俊輔語録（二）この九十年』には「あとがき」を書き下ろしてください。うれしかった。この本は、幸いなことに昨年重版している。

鶴見さんと初めてお会いしたのは、小生が、筑摩書房編集部に勤めていた一九九〇年のこと。「鶴見俊輔集（全一二巻）」（一九九一年〜一九九二年刊）の編集担当者としてだった。通常、本のオビ（帯＝宣伝文）は編集者が書くことになっているが、この「鶴見俊輔

集」では、オビの背のキャッチコピーには、鶴見さん自身に関わっていた。これまでに書かれた文章をジャンル別にまとめた著作集の各巻のテーマに、いま鶴見さんが考えていることをコピーとしてズバリつけるとどうなるか、知りたかったからだ。各巻のタイトルとオビの背のキャッチコピーは次のようになった。

○第一巻「アメリカ哲学」：戦争の傷口からプラグマティズムは生まれた

○第二巻「先行者たち」：理想は低く地面すれすれにもちたい

○第三巻「記号論集」：ウフフの哲学

○第四巻「転向研究」：まじめな人はこわい

○第五巻「現代日本思想史」：戦時から現在を考えた

○第六巻「限界芸術論」：あいまいさの持つ値打に注目する

○第七巻「漫画の読者として」：マンガの神がマンガの私を見る

○第八巻「私の地平線の上に」：もう一部分に立て

○第九巻「方法としてのアナキズム」

：私および私達は国家指導者ほど

の悪をなしえない

○第一〇巻「日常生活の思想」：夢は抵抗の拠点

○第一一卷「外からのまなざし」：日本にめざめるひとつのいとぐち

○第一二巻「読書回想」：この索引をあたらしい探索の起点としたい

この一二のオビの背の言葉は、当時七〇歳の鶴見俊輔さんをストリートに表現している、と今でも思う。

一九九四年の夏に筑摩書房退社の報告に緊張してうかがうと、黙って聞いていた鶴見さんが発した第一声は「健康保険には入った方がいい」。ふわっと未来への不安がほどけた。その後、小生は、新宿調理師専門学校に通って調理師免許の取得を目指したが、その頃に連れ合いと出していたミニコミ「悠遊亭通信」には、鶴見さんは購読料を前払いしてください。

一九九八年に鶴見さんの発案で『日本アナキズム運動人名事典』のプロジェクトが開始してからは、幾度も相談をさせていただくことになる。存命者は立項しない約束なのに、「水木しげるさんは、妖怪だからこの事典に入っても

らいましよ」との発言は圧巻だった。

現在、編集委員を務めている「大杉栄全集（全一三巻）」（ぼる出版）の推薦文を、一昨年（二〇一三年）、身体の調子が良くなった際に書いていただいたのもありがたいことだった。

誰にもゆずらない「小さな石」を自分の中に保つことを、厳しく教えていただいた二五年だと思っている。

連載（4） 悼●鶴見俊輔

生産点から生活点へ—— 非戦思想の今日的展開

武智 忍

国家が人間の生活に立ち入ってくるのに対して、たたかう力を準備しなければならない。

その力をつくる思想として、アナキズムは存在理由を持つ。

「方法としてのアナキズム」

七〇年、『展望』十一月号

二〇一五年、七月二十日。鶴見俊輔さんが亡くなった。九十三歳。

一九三二年（大正十一年）生まれ。中学を二度放校処分になった後、単身で渡米。

十五歳でハーバード大学に入学。一九四二年、三月。無政府主義者としてFBIに逮捕され、身柄を移民局に移される。

「古編だね。クロボトキンを読んでいたので、私は日米双方の政府に反対する。と言っちゃったんだ」

（『思い出袋』岩波新書）

六月、第二次日米交換船でアメリカを発ち、八月に帰国。

その後、軍に召集され、ジャワ（インドネシア）で情報部の任務につく。

*

日本のアナキズム史を語るとき、明治・幸徳秋水、大正・大杉栄、昭和に入って石川三四郎という人の流れが定説のようになっている。

石川の影響を強く受けた鶴見さんは、これとは少し違った人脈を図式化する。

幸徳はそのまま。これを継ぐものとして「木下尚江、石川三四郎」と続け大杉はその次、という見方。

石川が亡くなった五六年に刊行された『現代日本の思想—その五つの渦—』（岩波新書）

鶴見さんはその「あとがき」で「論

じ残された思想集団」として「日本の無政府主義」をあげ、晩年は活動から身を退いた、とされている木下をその系列に加えている。

大杉と石川。

重なり合う時代を生きた二人。一人は大逆事件後の「冬の時代」に敢然と国家に挑戦。もう一人の石川は事件の難を逃れヨーロッパへ。帰国後は東京郊外での自給自足に近い田園生活。そして「デイナミック」を発行しながら

おだやかな「非戦」思想を説く日々…。

革命を説いた大杉らの対象は、生産点に立つ労働者だった。が…。

「石川三四郎に会いに行ったのは敗戦後である。その後も、私の活動は、自分の日常生活からそれほど離れたものではない。」

（『方法としてのアナキズム』）

鶴見さんの出発、対象は市民の日常。

階級、階層は問わず、ダレでも、声をあげたものが運動の中心になる。

そんな発想から生まれた運動体の連合。「ベトナムに平和を 市民連合」は、大きな社会現象にさえなった。

秋山清さんにまつわる会「コスモス忌」での鶴見さんの提言から、〇四年、『日本アナキズム運動人名事典』（ぼる

出版）が刊行されている。

*

波乱、激動の七〇年代の記憶…。

そのメインとなるのは、一過性の学生運動や、組合エゴ、党派エゴに落ちていった労働運動などではない。

今も胸の奥に息づく感動は、ダレでも、どこでも、名乗ったものが運動を始める、という鶴見さんの放った「鶴のひと声」である。

*

九月十九日。「安保Ⅱ戦争法案」が国会を通過した。

アベ首相は勝者か？

—否—

長い戦後の決算、「憲法改正」を豪語した小人は、今回も議員バツジを着けた衆愚を走らせただけの小・仕事に終わった。

一九六五年。鶴見さんは、国家への不服従行動を促す数千、数万の種を全国に放った。

あれから五十年。

若い行動グループ「シルズ」の奥田愛基氏は「代表は私でなく、全国で立ち上がった一人、ひとりが反対の声の代表者なのです」と語っている。

鶴見さんの肉体を知らない世代の胸に、あの時まかれた種の一粒がちいさな芽をつけた—かに写る。

八・六広島集会 参加報告

編集部

主催者の一人である田中ひかるさんから当センターについて話してほしいと依頼されたことから、八・六広島集会に参加。個人的には広島への訪問は初めだっただけに、いろいろと勉強になった。

当日は朝九時に原爆ドーム前集合してデモに出発。「国家による追悼反対」など記念式典反対はもちろん、安倍政権批判などのシユプレヒコール。短時間ではあったが、充実の十五分だった。終点では各地から駆けつけた仲間による簡単な

挨拶。神戸のHさんからは亡くなった仲間から受け継いできた黒旗を掲げてのアピールが印象深かった。

その後有志による広島 観光 ツアーに同行。七十年前のこの日、川の町・広島では川原に遺体がたくさん打ち上げられていたという話が心に刺さる。平和記念資料館は通り越して、「解放運動 無名戦士之墓」へ。農村青年社の和佐田さんなども関わって建立されたとのこと。

そして、公園内に設置されないという、死してなお差別された在日韓国人被爆者慰霊碑の見学（現在は公園内に移設等。午後は広島市東区民文化センターに移動して集会。残念ながら、フィリピンからのゲストであるバス氏 (Bas Umahn) が体調を崩してしまい急ぎよ来日できなくなったというアクシデントがあったものの、主催者である吉岡文春さんによる「開会の挨拶と八・六集会の歴史」（集会の歴史は前号参照）からはじまり、プラ

ジルから来日し、日本のアナキズムについての博士論文を準備中だという「Utaharaさんからは六十年代のブラジルアナキズムのお話。当センターは、「アナキズム文献センターの歩みと現在」と題して、ビジュアル資料を中心に説明した（当日の報告資料は田中さんのご協力で英文を付した上で当センターのホームページで公開中）。

その後、ドイツからの広島集会へのビデオメッセージや、バスから届いた資料を田中さんが説明し、通訳として参加していた吉田かおりさんからは自身も訪問したフィリピンのアナキズムについての補足説明など、各参加者から中身の濃い報告があった。特に、本人が参加できずに非常に残念であったが、フィリピンで行われている活動は興味深く、災害時のアナキズムネットワークを活かしたコミュニティ支援や子供たちに本がある環境を作るなどの文化的プロジェクトなど、これからの日本での活動に参考になるものが多々あった。

なお、当センターに関して「フランスやチリから連絡しても返信がないと言われた。今や文献センターは世界から日本の一つの窓口として見られているので、きちんとしてほしい」というご意見をいただいた。集会後、迷惑メールが多くなっ

ていた現状を鑑みてアドレスを変更、その上で運営委員二名でメールチェックするという体制を築いたことを最後にご報告したい。

以前本誌でも紹介した劇場用映画『シュトルム・ウント・ドラック』のDVDが七月三十日に発売された。

同作品は、大正時代に活動したギロチン社の若者たちを、独特の映像美に定評がある山田勇男監督が映像化したもの。昨年八月の東京劇場公開時にはアンコール上映されるほどのヒットに。Amazonなどで好評発売中。

先着五名様に特別価格（送料+税込）三二〇〇円（定価四一〇四円）での販売あり。問い合わせ（同映画製作委員会：080-5011-7928）



た。今や文献センターは世界から日本

た。今や文献センターは世界から日本



シュトルム・ウント・ドラック

Puff blis xxxxxx to your antidote

「混沌」の美化を斥けること／〈起源〉への
 回帰を宙吊りにすること タデウシユ・カントル生誕百年

後藤優子

芸術家の家として誕生日

絵画、スペクタクル、演劇、舞

台

私の作品は私の家であったし、
 今もそうあり続けている。

(T・カントル)

「私」が帰りつく場所は、はたしてどこにあるのだろうか？ カントルにとってそれはただひとつの「家」ではなかった——Tadeusz Kantor は第一次世界大戦のさなかポーランドのヴィエロポーレ村でカトリックの母とユダヤ教徒の父とのあいだに生まれる。ふたつの宗教が「共生する」場所とは彼自身の弁であるが、かかる環境において長じるとクラクフの美術大学に進んだ。ヴィエロポーレもクラクフもポーランドの南部ガリツィアにあり、当時三つに分割された領土のうちオーストリア・ハンガリア帝国に属していた。九万ほ

どの人口に対しおびただしい数の教会が存在したクラクフには十九世紀なかば以降ひっきりなしに「葬列」が街をゆきすぎる。過去の偉人を顕彰するための再葬儀は、晴れがましい大行事であり、政治的な示威行為を意味していた。ネクロポリアのおもむきさながらの古都はまた世紀末の「新芸術」の心地でもあった。ガリツィアに独自の精神が容認された理由はロシア領、ドイツ領と異なりそこがハプスブルク連邦の一員として自治体制をしいていたことによる。かかる括弧つきの自由をしかしカントルは一面で享受した。と同時に必然な行為として〈自由〉の本質を考えぬいていった。第二次世界大戦のさなか彼は青年期をむかえる。ポーランド独立運動に参加した父親は第一次世界大戦が終わっても帰らず地下でレジスタンスをつづけるうちナチス

によって殺されていた。そのことを知らないまま同一九四四年『オデュッセウスの帰還』を演出したのがカントルの演劇における出発となった。大学ではじめ絵画をまなんだ彼はシュルレアリスムの手法を探る。中欧における「アヴァンギャルド」はかの地の芸術家たちの参加のもと誕生したのではなく、彼らが育った現実——じぶんだけの悟りや夢想にひたるような「観照」的態度——に対し突きつけられた挑戦だった。かくてカントルの旗色は鮮明にされる。塵芥捨て場と未明の薄闇にのみ存在するようなオブジェ「最下層の現実」をモチーフとしつつもそれらを逆特権的に美化しないこと！ 彼におけるイリュージョンの構成要素である人物たちは仮構世界をとびだし現実世界にとびこむことよってイリュージョンの「解体」をなしとげるのである。

私は幻想を容認しよう。

幻想の存在を認めてこそ、

それを不断に打ち砕くこともできるのだから。(『今日は私の誕生日』)

戦後の独立にかかわらずポーランドで

は「社会主義リアリズム」の遵守が表現者に義務づけられる。カントルは一九四九年に美術アカデミーをみずから辞任したうえ創作態度においても政府の方針にしたがおうとはしなかった。そして六十年代にハプニングの演出をしたのち生涯に六本のスペクタクルしかつくりたいと宣言しその通りになった(『死の教室』75' 『そぞの雪は今いずこ』79' 『ヴィエロポーレ・ヴィエロポーレ』80' 『くたばれ！ 芸術家』85' 『私は二度とここにもどらない』88' 『今日は私の誕生日』90'。ところでカントル率いる劇団「Cricot 2」は二度来日している。一九八二年の国際演劇祭(富山県利賀村)では以前から親交があった寺山修司の「天井桟敷」とも共演をはたす。彼らには二十歳の差があるが、近代に生を享け戦時を経験していること、「父の不在」においては一致をみる。しかし「死」と対峙するとき両者の姿勢はいかに異なっていることか。利賀の年に寺山が書いた詩「懐かしのわが家」には、死の予感のなか、かつて住まった故郷の家へと帰ってゆく詩人がいた。「ぼくは世界の涯てが自分身のなかにしかないことを知って

いたのだ」そう結ぶ彼はオホオヤの腕に抱かれた赤子のように安心しきって充足している。「前衛」は内なるへ私への回帰をとげたのだろうか？ 一方の

カントルは、一九九〇年演出のさなかに急逝する。その『今日は私の誕生日』

にはエピソードが存在しない。不意に登場人物たちはオブジェのごとく動きを止め静寂は周囲をみたく。かつて思索の独房に沈潜した「私」が「私」に倦み疲れたときすでに考えはきまっていたのだ。芸術家は一瞬の死なる硬直を通過し「われわれ」の世界に再生する。

〔参考文献〕

加須屋明子『ポーランドの前衛美術 生き延びるための「応用ファンタジー」』（2014）創元社

関口時正『ポーランドと他者 文化・レトリック・地図』（2014）みすず書房

カントル、タデウシユ『我が芸術』旅行カントル『翻訳監修・関口時正（1994）セゾン美術館

〔カントル関係イベント〕

於シアターカイ <http://www.theaterx.jp>
10月1〜4日 ヴェイトカツィ『母』
10月3日 第二回シンポジウム「カントルとヴェイトカツィ」

11月15〜17日 『猫も杓子もカントル』
12月初旬 『ある晴れた日に』

演劇紹介

劇作家・平田オリザ（作・演出）が大杉栄と伊藤野枝の最期の二ヶ月を綴った大人の会話劇『走りながら眠れ』が全国四ヶ所で再演される。

（兵庫）伊丹公演：十月十日（土）、十一日（日）二回公演、（香川）善通寺公演：十月十七日（土）、十八日（日）二回公演、松山公演：十月二十一日（水）一回公演、東京公演：十一月六日（金）、七日（土）、九日（月）十四日（土）、十六日（月）五回公演

お問い合わせは劇団青年団（03-3469-9107、12〜20時）まで。



八街だより

■寄贈 ルティ・ジョスコヴィツさんより自著『私のなかのユダヤ人』執筆に際してフランスからイスラエル、パレスチナそしてポーランドを辿った取材資料など段ボール・五箱分が寄せられた。有難うございます。

■九月十九〜二十日、ほぼ一年ぶりに作業を再開。初夏に一度トンボ返りでダンボール十箱ほどを運びましたが、作業は中断して久しいので、まず作業の進捗状況を思い出しつつ現況の確認と掃除、新着資料の区分けといった程度の作業にとどめた。まだ足腰が完全ではないので無理をせず、目録作成には手を着けなかった。

■作業チームの三人がそれぞれにトラブルを抱えて八街から遠のいてしまったことは前号で記した通りですが、これから徐々にチームの再編を期して山積した作業を片づけて遅れを取りもどしていきたい。全く予期しなかった事態であったが、自然の成り行きでもあったと悟れば、あとは先行きの見通しをしっかりと立てるしか手はないでしょう。

■昨秋の総会でも出たように、センターの組織化に向けた課題が待ったなしの時期にさしかかっているとも言える。振り返ってみると、「ポスト龍はどうするのだ」と、のほほんと龍さん任せにしていた私たちに問題を突きつけたのは平山、前田さんたち神戸の人たちであった。尻をたたかれて取り組み始めてこれこれ十年になる。後退してはいないと思うものの、かと言ってさしたる前進でもない。そろそろ形にしていけないと後に托してもいけない。まずは書庫（現在のプレハブではなく、資料の劣化を十分に防げる書庫）づくりを手がかりにして討議を開始したいものである。（奥沢邦成）

アナキズム文献センター通信第32号

発行／2015年9月30日

発行所／アナキズム文献センター

編集／運営委員会

連絡先／東京都新宿区新宿

1-30-12-302

郵便振替口座／

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール／contact@cira-japana.net

定価／一部100円